

刺繡

島崎藤村

青空文庫

ふと大塚さんは眼が覺めた。

やがて夜が明ける頃だ。部屋に横たわりながら、聞くと、雨戸へ来る雨の音がする。いかにも春先の根岸辺の空を通り過ぎるような雨だ。その音で、大塚さんは起されたのだ。寢床の上で独り耳を澄まして、彼は柔かな雨の音に聞き入った。長いこと、蒲団や搔巻にくるまつて曲んでいた彼の年老いた身体が、復た延び延びして来た。寢心地の好い時だ。手も、足も、だるかった。彼は臥床の上へ投出した足を更に投出したかった。土の中に籠つていた虫と同じように、彼の生命は復た眠から匍出した。

大塚さんは五十を越していた。しかしこれから若く成つて行くのか、それとも老境に向つて居るのか、その差別のつかないような人で、氣象の壯んなことは壯年に劣らなかつた。頼りになる子も無く、財産を分けて遣る樂みも無く、こんな風にして死んで了うのか、そんなことを心細く考え易い年頃でありながら、何ぞというと彼は癪のように、「まだそんな耄碌はしないヨ」と言つて見る方の人だった。有り余る程の精力を持った彼は、これまで散々種々なことを経営して来て、何かまだ新規に始めたいとすら思つていた。彼は臥床の上にジツとして、書生や召使の者が起出すのを待つていられなかつた。

でも、早く眼が覚めるように成つただけ、年を取つたか、そう思いながら、雨の音のしなくなる頃には、彼は最早臥床を離れた。

やがて彼は自分の部屋から、雨揚りの後の静かな庭へ出て見た。そして、やわらかい香気の好い空気を広い肺の底までも呼吸した。長く濃かつた髪は灰色に変わつて来て、染めるに手数は掛かつたが、よく手入して、その額へ垂下つて来るやつを搔上げる度に、若い時と同じような快感を覚えた。堅い地を割つて、草の芽も青々とした頭を擡げる時だ。彼は自分の内部の方から何となく心地の好い温熱が湧き上つて来ることを感じた。

例のように、会社の見廻りに行く時が来た。大塚さんは根岸にある自宅から京橋の方へ出掛けて、しばらく会社で時を移した。用達することがあつて、銀座の通へ出た頃は、実に体軀が暢々とした。腰の痛いことも忘れた。いかに自由で、いかに手足の言うことを利くような日が、復た廻り廻つて来たろう。すこし逆上せる程の日光を浴びながら、店々の飾窓などの前を歩いて、尾張町まで行つた。広い町の片側には、流行の衣裳を着けた女連、若い夫婦、外国の婦人などが往つたり来たりしていた。ふと、ある店頭のところ、買物している丸髻姿の婦人を見掛けた。

大塚さんは心に叫ぼうとしたほど、その婦人を見て驚いた。三年ほど前に別れた彼の妻

だ。

避ける間隙すきも無かつた。彼女は以前の夫の方を振向いた。大塚さんはハツと思つて、見たような見ないような振をしながら、そのまま急ぎ足に通り過ぎたが、総身電気にでも打たれたように感じた。

「おせんさん——」

と彼女の名を口中で呼んで見て、半町ほども行つてから、振返つて見た。明るい黄緑きみどりの花を垂れた柳並木を通して、電車通の向側へ渡つて行く二人の女連の姿が見えた……その一人が彼女らしかつた……

彼女はまだ若く見えた。その筈はずだ、大塚さんと結婚した時が二十で、別れた時が二十五だったから。彼女がある医者いしやの細君こがすけに成つていてということも、同じ東京の中に住んでいてということも、大塚さんは耳みみにしていた。しかし別れて三年ほどの間よくも分らなかつた彼女の消息が、その時、閃ひらめくように彼の頭脳あたまの中へ入つて来た。流行はやりの薄色の肩掛かたかけなどを纏まとい着けた彼女の姿を一目見たばかりで、どういふ人と暮しているか、どういふ家を持つているか、そんなことが絶間とめどもなく想像された。

種々いろいろな色彩いろに塗られた銀座通の高い建物の壁には温あたたか暖かな日あが映あつていた。用達の為ぎわに歩き廻る途中、時々彼は往来で足を留めて、おせんのことを考えた。彼女が別れ際ぎわに残して行つた長い長い悲哀かなしみを考えた。

恐らく、彼女は今幸しあわせ福ふらしい……無邪気な小鳥……

彼女が行つた後の火の消えたような家庭……暗い寂しい日……それを考えたら何故あんな可愛い小鳥を逃がして了つたろう……何故もつと彼女を大切にしなかつたろう……大塚さんは他人の妻に成つてゐる彼女を眼まのあたりに見て、今更のようにそんなことを考え続けた。

午後に、会社へ戻ると、車夫が車を持つて来て彼を待つていた。彼はそれに乗つて諸ほうぼ方うかけ馳かずり廻るには堪たえられなく成つて来た。銀行へ行くことも止めやめ、他の会社に人を訪ねることも止め、用達をそこそこに切揚げて、車はそのまま根岸の家の方へ走らせることにした。

大塚さんが彼女と一緒に成つたに就いては、その当時、親戚や友人の間に激しい反対もあつた。それに関かわらず彼は自分よりずっと年の若い女を扱えらんだ。楽しい結婚は何物にも換えられなかつた。そんな風にして始まつた二人の結び付きから、不幸な別離わかれに終つたまで

のことが、三年前の悲しいも、八年前の嬉しいも、殆ど一緒に成って、車の上にある大塚さんの胸に浮んだ。

もとより、大塚さんがおせんと一緒に成った時は、初めて結婚する人では無かった。年齢が何よりの証拠だ。しかし親戚や友人が止めたように、八年前の彼は二十に成るおせんを妻にして、そう不似合な夫婦がそこへ出来上ると思っていなかった。活気と、精力と、無限の欲望とは、今だに彼を壮年のように思わせている。まして八年前。その証拠には、おせんと並んで歩いていた頃でも、誰も夫婦らしくないと言った眼付して二人を見て笑ったものも無かった。すくなくも大塚さんにはそう思われた。どうして、おせんが地味な服装でもして、いくらか彼の方へ歩び寄るところか。彼女は今でもあの通りの派手づくりだ。若く美しい妻を専有するということは、しかし彼が想像したほど、唯楽しいばかりのものでも無かった。結婚して六十日経つか経たないに、最早彼は疲れて了った。駄目、駄目、もうすこし男性の心情が理解されそうなものだとか、もうすこし他の目に付かないような服装が出来そうなものだとか、もうすこしどうかいふ毅然とした女に成れそうなものだとか、過る同棲の年月の間、一日として心に彼女を責めない日は無かった――

三年振で別れた妻に逢つて見た大塚さんは、この平素ふだん信じていたことを——そうだ、よく彼女に向つて、誰だれ某それは女でもなかなかのシツカリものだなどと言つて褒めて聞かせたことを、根から底からひつくりかえ転倒されたような心こころ地もちに成つた。「シツカリものだが何だ」
こう以前の自分とは反対あべこべなことを言つて、家へ戻つて来た。彼は自分の家の内に、居ないおせんを捜した。幾つかある部屋部屋へ行つて見た。

内なかの庭に向いた廊下りやうかのところ、白い毛の長いマルが主人を見つけて馳かけて来た。おせんのいる頃から飼われた狎ちんだ。体なり軀は小さいが、性質の賢いもので、よく人に慣れていた。二人で屋外そとからでも帰つて来ると、一番先におせんの足音を聞付けるのはこのマルだった。そして、彼女の裾すそに纏まとひ着いたものだ。大塚さんは、この小さい犬を抱いて可愛かわいがったおせんが、まだその廊下りやうかのところところに立っているようにも思つた。

食堂へ行つて見た。そこにはおせんが居た時と同じように、大きな櫛けづくりの食卓が置いてある。黒い六角形の柱時計も同じように掛つている。大塚さんはその食卓の側に坐つて、珈琲コーヒーでも持つて来るように、と田舎々々した小娘に吩咐いひつけけた。廊下を隔てて勝手の方が見える。働好きな婆さんが上草履うわぞうりの音をさせている。小娘は婆さんの孫にあたるが、

おせんが行った後で、田舎から呼び迎えたのだ。家には書生も二人ほど置いてある。しかし、おせん時代のことを知っているものは、主人思いの婆さんより外に無かった。婆さんは長く奉公して、主人が食物の嗜好までも好く知っていた。

小娘は珈琲茶碗ちやわんを運んで来た。婆さんも牛乳の入物を持って勝手の方から来た。その後から、マルも随ついて入って来た。

「マルも年をとりまして御座いますよ。この節は風邪かぜばかり引いて、嚏くしゃみばかり致しております」

こう婆さんが話した。大塚さんはその日別れた妻に逢ったことを、誰も家のものには言出さなかつた。

マルは尻尾しっぽを振りながら、主人の側へ来た。大塚さんが頭を撫なでてやると、白い毛の長くおおくかぶ掩おお冠かぶさつた額を向けて、ゆらしい眼付で彼の方を見て、嬉しそうに鼻をクンクン言おわせた。

こうして家の内を眺め廻した時は、おせんらしいおせんは一番その静かな食卓の周囲まわりに居るように思われた。おせんは夫を助けて働ける女では無かつたし、殊ことに客なぞのある場合には、もうすこし細君らしい威厳そなを具そなえていたら、と思うことも多かつた。「奥様はあ

んまり愛嬌あいきょうが有り過ぎるんで御座いますよ、誰にでも好くしようと成さり過ぎるんで御座いますよ」と婆さんまでが言う位だった。でも食卓の周囲などは楽しくした方で、よくその食堂の隅すみのところに珈琲を研ひく道具を持出して、自分で煎いったやつをガリガリと研いたものだ。

香ばしい珈琲のにおいは、過去った方へ大塚さんの心を連れて行った。マルを膝ひざに乗せて、その食卓に對むかひ合っていた時の、彼女の軽い笑を、まだ大塚さんは聞くことが出来た。毛糸なども編むことが上手で、青と白とで造った円形の花瓶かびん敷敷を敷いて、好い香ばのする薔ば薇ばでその食卓の上を飾って見せたものだ。花は何に限らず好きだったが、黄な薔薇ばは殊ばにおせんが好きな花だった。そして、自分で眼を細くして、その香にお気いを嗅かいで見るばかりでなく、それを家のものにも嗅かがせた。マルにまで嗅かがせた。まだ大塚さんはその食卓の上に載せた彼女の白い優しい手を見ることが出来た。その薔薇ばを花瓶のまま持つて夫に勧めた時の、彼女の呼吸までも聞くことが出来た。

庭へ行つて見た。食堂から奥の座敷へ通うところは廻廊風まわりに出来ていて、その間に静かな前栽せんざいがある。可成かなり広い、植木の多い庭が前栽せんざいつづきに座敷の周囲まわりを取繞とりまっている。古

い小さな庭井戸に近く、毎年のように花をつける桜の若木もある。他の植木に比べると、その細い幹はズンズン高くなつた。最早紅くふくらんだ蕾を垂れていたが、弘暁の温かい雨で咲出したのもある。そこはおせんが着物の裾を帯の間に挿んで、派手な模様の長襦袢だけ出して、素足に庭下駄を穿きながら、草むしりなどを根気にしたところだ。大塚さんは春らしい日の映つた庭土の上を歩き廻つて、どうかすると彼女が子供のようによい活であつたことを思出した。

そうだ。優しい前髪と、すらりとした女らしい背とを持つた子供だった。彼女が嫁いて来たばかりの頃は、大塚さんは湯島の方にもっと大きな邸を持つていたが、ある関係の深い銀行の破産から、他に貸してあつたこの根岸の家の方へ移り住んだのだ。そういう時に成ると、おせんは何をして可いかも解らないような人で、自分の櫛箱の仕末まで夫の手を煩わして、マルを抱きながら、それを見ていたものだ。それほど子供らしかった。ああいう時には、大塚さんはもう嘆息して了つた。でも、この根岸へ移つて落着いてからは、春先に成ると蓬の芽を摘みに行くところがあると悦んで、軽々とした服装をしては出掛けに行つて、その帰りには堇の花などを植木屋から買つて戻つて来た。その無邪気さには、又、憎むこともどうすることも出来ないようなところが有つた。

こういう娘のような気で何時までも居て、時には可愛くて可愛くて成らなかつたおせんが、次第に大塚さんには見ても飽き飽きする様な人に変つて行つた。彼女と別れる前の年あたりには、大塚さんは何でも彼女の思う通りに任せて、万事家のことは放擲して了つた。小言一つ言わなかつた……唯、彼女を避けようとした……そして自分は会社のことにばかり出歩いた……さもなければ、会社の用事に仮托けて、旅にばかり出掛けた……そんなことをして、名のつけようの無い悲哀を忘れようとした……

おせんと同棲して五年ばかり経つた時の大塚さんは、何とかして彼女と別れる機会をのみ待つた。機会が来た……しかも堪え難い形でやつて来た……それを大塚さんは考えた。

彼女の旧の居間へ行つて見た。今は親しい客でも有る時に通す特別な応接間に用いている。そこだけは、西洋風にテーブルを置いて、安楽椅子に腰掛けるようにしてある。大塚さんはその一つに腰掛けて見た。

可傷しい記憶の残つているのも、その部屋だ。若く美しい妻を置いて、独りで寂しく旅ばかりするように成つたということや、あれ程親戚友人の反対が有つたにも関わらず、誰の言うことも聞入れずに迎えたおせん、その人と終には別れる機会をのみ待つように成つて

行つたといふことは、後から考えれば、夢のようだ。実際、それが事実であつたから仕方ない。何物にも換えられなかつた楽しい結婚の褥しとね、そこから老い行く生命いのちを噛かむような可お恐そしい虫が這出はいだそうとは……

大塚さんは彼女を放うつち擲ちして関かわらずに置いた日のことを考えた。あらゆる夫婦らしい親した密しみも快た楽のしみも行つて了つたことを考えた。おせんは編物ばかりでなく、手工に關したことは何でも好きな女で、刺し繡しゅうなぞも好くしたが、終しまにはそんな細い仕事にまぎれてこの部屋で日を送つていたことを考えた。

悲しい幕が開けて行つた。大塚さんはその刺繡台の側に、許し難い、若い二人を見つけた。尤もつとも、親しげに言葉の取とり換かわされる様子を見たというまでで、以前家に置いてあつた書生が彼女の部屋へ出で入はいりしたからと言つて、咎とがめようも無かつたが……疑えば疑えなくもないようなことは数々あつた……彼は鋭い刃物の先で、妻の白い胸を切開いて見たいと思つた程、烈はげしい嫉妬しつとで震えるように成つて行つた。

そこまで考え続けると、おせんのことばかりでなく、大塚さんは自分自身が前よりはハツキリと見えて来た。そういう悲しい幕の方へ彼女を追い遣やつたのは、誰か。よしんばおせんは、彼女が自分で弁解したように、罪の無いものにもせよ——冷やかに放うつち擲ちして

置くような夫よりは、意気地は無くとも親切な若者を悦んだであろう。それを悦ばせるようにしたものは、誰か。そういうことを機会に別れようとして、彼女の去る日をのみ待っていたものは、一体誰か。

制え難い悔恨の情が起つて来た。おせんがこの部屋で董の刺繍なぞを造ろうとしては、花の型のある紙を切地に宛行つたり、その上から白粉を塗つたりして置いて、それに添うて薄紫色のすが糸を運んでいた光景が、唯涙脆かつたような人だけに、余計可哀そうに思われて来た。大塚さんは、安楽椅子に倚りながら、種々なことを思出した。若い妻が訳もなく夫を畏れるような眼付して、自分の方を見たことを思出した。彼女の鼻をかむ音がよくこの部屋から聞えたことを思出した。

今居る書生の一人がそこへ入つて来た。訪問の客のあることを告げた。大塚さんは沈思を破られたという風で、誰にも逢いたくないと言って、用事だけ聞いて置くようにとその書生に吩咐けた。

「いずれ会社のを伺わせませぬ、その節は電話で申上げますツて、そう言つてくれ給え」と附添えて言つた。大塚さんが客を謝るといは、めずらしいことだった。

書生が出て行つた後、大塚さんはその部屋の内を歩いて、そこに箆笥たんすが置いてあつた、ここに屏風びょうぶが立て廻してあつた、と思ひ浮べた。襖ふすま一つ隔てて直ぐその次にある納戸なんどへも行つて見た。そこはおせんが鏡に向つて髪をとかした小部屋だ。彼女の長い着物や肌はだにつけた襦袢じゆばんなどがよく掛つていたところだ。

何か残つている物でも出て来るか、こう思つて、大塚さんは戸棚の中までも開けて見た。そうだ、おせんは身に覚えが無いと言つて泣いたりしたが、終しまひには観念くわんねんしたと見え、紅く泣腫はらした顔を揚げて、生家さとの方へ帰れという夫の言葉に随したがつた。そんな場合ですら、彼女は自分で自分の身のまわりの物をどう仕末して可いかも解らなかつた。殆んど途方に暮れていた。夫の手伝いなしには、碌ろくに柳行李やなぎごうり一つ纏まとめることも出来なかつた。見るに見兼ねて、大塚さんは彼女の風呂敷包までも包み直して遣つた。車に乗るまでも見て遣つた。まるで自分の娘でも送り出すように。それほど無邪気な人だつた。

納戸から、部屋を通して、庭の方が見える。おせんが出たり入つたりした頃の部屋の光景まが眼に浮ぶ。庭には古い躑躅つじの幹もあつて、その細い枝に紫色の花をつける頃には、それが日に映じて、部屋の障子までも明るく薄紫の色に見せる。どうかすると、その暖い色が彼女の仮寝うたたねしている畳の上まで来ていることも有つた。

急に庭の方で、

「マル——来い、来い」

と呼ぶ書生の声が始つた。

マルは廊下伝いに駆出して来た。庭へ下りようともせず、戯けるような声を出して鳴いた。

おせんが子のように愛した狎の鳴声は、余計に彼女のことを想わせた。一人も彼女に子供が無かつたことなどを思わせた。大塚さんは納戸を離れて、部屋にある安楽椅子の後を廻つた。廊下へ出て見ると、咲きかけた桜の若葉が眼前めのまえにある。麗かな春の光は花に映じている。

マルは呻くうめような声を出しながら、主人の方へ忍んで来たが、やがて掻きか付いて嬉しげに尻尾を振つて見せた。この長く飼われた犬は、人の表情を読むことを知っていた。おせんが見えなく成つた当座などは、家の内を探し歩いて、ツマラナイような顔付をして萎れしお返つていたものだ。

大塚さんはマルを膝の上に乗せて、抱締るようにして顔を寄せた。白い、柔な狎の毛は、あだかもおせんの頬に触れる思をさせた。

別れるのは反かえつてお互の為だ、そんなことをおせんに言い聞かせて、生家さとの方へ歸してやつた。大塚さんはそれも考えて見た。

別れて何か為に成つたらうか。決してそうで無かつた。後に成つて、反つて大塚さんは眼に見えない若い二人の交とりかわ換す言葉や、手紙や、それから逢あひびき曳する光景さままでもありありと想像した。それを思うと仕事も碌々手に着かないで、ある時は二人の在ありか処を突留めようと思つたり、ある時は自分の年としが甲斐も無いことを笑つたり、ある時は美しく節操みさおの無い女の心を卑しんだりして、それ見たかと言わなければかりの親戚友人の嘲あざけりの中なかに坐つて、淋しい日を送つたことが多かつた。彼女が後へ残して行つた長い長い悲哀かなしみは、唯さえ白く成つて来た大塚さんの髪を余計に白くした。

おせんがある医者のところへ嫁かたづいたという噂は、何か重荷でも卸したように、大塚さんの心を離れさせた。曾かつて彼の妻であつた人も、今は最早全く他人のものだ。それを彼は實際に見て来たのだ。

万事大塚さんには惜しく成つて来た。女というものの考え方からして變つて来るように成つた。男性おしこの心情なぞはそう理解されなくとも可いい、仕事の手伝いなぞはどうでも可いい、

と成つて来た。働き者だとか、気性勝りだとか言われて、男と戦おうとばかりするような毅然した女よりも、反つて涙脆い、柔軟な感じのする人の方が好ましい。快活であれば猶好い。移り気も一概には退けられない。不義する位のもは、何処かに人の心を引く可懐みもある。ああいうおせんのような女をよく面倒見て、気長に注意を怠らないようにしてやれば、年をとるに随つて、存外好い主婦と成つたかも知れない。多情も熟すれば美しい。

人間の価値はまるで転倒して了つた。彼はおせんと別れるより外に仕方が無かつたことを哀しく思つた。何故初めからもつと大切にすることは出来なかつたらうと思つて見た。マルの毛を撫でながら、こんな考えに沈んでいるところへ、律義顔な婆さんが勝手の方から廊下を廻つてやつて来た。

大塚さんの親戚からと言つて、春らしい到来物が着いた。青々とした笹の葉の上には、まだ生きているような鰈が幾尾かあつた。それを見せに来た。婆さんは大きな皿を手に持つたまま、大塚さんの顔を眺めて、

「旦那様は御塩焼の方が宜しゅう御座いますか。只今は誠に御魚の少い時ですから、この鰈はめずらしゅう御座いますよ。鰯に鯖などはまだ出たばかりで御座いますよ」

こう言つて主人の悦ぶ容子ようすを見ようとした。

何かおせんおせんの着物で残つていゝものはないか。こう大塚さんは何気なく婆さんに尋ねた。婆さんは不思議そうに、

「奥様の御召物で御座いますか。何一つ御残し遊ばした物は御座いません。何から何まで御生家おさとの方へ御送りしたんですもの……何物なんにも置かない方が好いなんと仰おつしやつて……そりや、旦那様、御寝衣おねまきまで後で私が御洗濯しまして、御蒲団やなんかと一緒に御送りいたしました」

と答えたが、やがて独ひとりごと語ことでも言うように、

「旦那様は今日はどう遊ばしたんですか……奥様の御召物が残つていないかなんて、ついでそんなことを御尋ねに成つたことも無いのに……」

こう言つて見て、手に持った魚の皿を勝手の方へ運んで行つた。

庭で鳴く小鳥の声までも、大塚さんの耳には、復た回めぐつて来た春を私語ささやいた。あらゆる記憶が若草のように蘇いきかえ生なる時だ。楽しい身体おんなの熱は、妙に別れた妻を恋しく思わせた。

夕飯の頃には、針仕事に通つて来ている婦おんなも帰つて行つた。書生は電話口でしきりとガチャガチャ音をさせていた。電燈でんとうの点ついた食堂で、大塚さんは例の食卓しょくたくに対して、おせん

と一緒に食った時のことを思出した。燈火あかりに映った彼女の頬を思い出した。殊に湯上りの時などはその頬を紅くして笑って見せたことを思出した。

「御塩焼は奈何いかがで御座いますか。もし何でしたら、海胆うにでも御着け遊ばしたら——」

と言つて婆さんは勝手の方から来た。婆さんの孫娘がかしこまって給仕する側には、マールも居て、主人の食う方を眺めたが、時々物欲しそうな声を出したり、拜むような真似まねをしたりした。

音沙汰おとさたの無い、どうしているか解らないような子息むすこのことも、大塚さんの胸に浮んだ。

大塚さんは全く子が無いでは無い。一人ある。しかも今では音信不通な人に成っている。

その人は大塚さんがずっと若い時に出来た子息で、体格は父に似て大きい方だった。背などは父ほどあつた。大塚さんがこの子息におせんを紹介した時は、若い母の方が反つて年と少すくだった。

湯島の家の方で親子揃そろつて食った時のことが浮んで来た。この同じ食卓があゝの以前の住居まいに置いてある。青蓋あおがさの洋燈ランプが照している。そこには嫁かたづいて来たばかりのおせんが居る。彼女のことを「おせんさん、おせんさん」と親しげには呼んでも、決して「母親おつかさん」とは言わなかつた彼の子息が居る……尤も、その頃から次第に子息は家へ寄付かなく成つて

行つたかとも思われる。

食事の済む頃に、婆さんは香ばしく入れた茶と、干葡萄ほしぶどうを小皿に盛って持つて来て、食卓の上に置いた。それを主人に勧めながら、お針に來ている婦おんなの置いて行つたという話をした。

「あの方がそう申しますんですよ。是方こちからの旦那様も奥様を探して被い入しやる御様子ですが、丁度好きそうな人が御座いますとかッて。聞き込んだ筋が好いそうでした……なんでも御家は御寺様だそうで御座いますよ……その方はあんまり御家の格が好いものですから、それで反つて御嫁に行き損そこなつて御了いなすつたとか。学問は御有んなさるし、立派な御方なんだそうで御座います。御年は四十位だとか申しました。まだ御独身おひとりで。よく華族様方の御嬢様なぞにも、そういう風で、年をとつて御了いなさる方が御有んなさいますそうですね……それからあの方が、丁度あの位の奥様が御為にも宜しかろうかッて、そう申してますよ……尤も、こればかりは御縁で御座いますから」

こういう話を聞く度に、大塚さんは耳を塞ふさぎたかつた。

おせんのような妻と一緒に住むような日は、最早二度と無かろうか。それを思うと、銀

座で逢った人が余計に大塚さんの眼前めのまえに彷彿ちらついた。黄ばんだ柳の花を通して見た彼女——
—仮令たとえ一目でもそれが精くわしく細かく見たよりは、何となく彼女の沈着おちついて来たことや、自然に身体からだの出来て来たことや、それから全体としての女らしい姿勢を、反さかつてよく思い浮べることが出来た。

その晩、大塚さんは自分の臥ねたり起きたりする部屋こもに籠こもつて、そこに彼女を探して見た。戸棚から、用筆筒から、古い手紙の中までも探した。彼女が夫に宛あててて書いたということ
は極まく稀まれだった。それすら何処どこかへ散じて了しまった。

刺繍ちびるが出て来た。彼女の手縫ちびるにしたものだ。好い記念だ。紅い薔薇の花はな弁なびらが彼女の口くち
唇ちびるを思おもわせるように出来ている。大塚さんはそれを自分の顔に押宛おしあてて押宛おしあてして見た。

温暖あたたかい晩だ。この陽気では庭の花はなざかりも近い。復た夜が明けてからの日光も思おもいや
られる。光と熱——それはすべての生物の願ねがいだ。とは言いいなながら、婆おばさんでも、マルで
も、事実それを樂たのむことは薄うすらいで来た。周囲あたりのものものは皆みなな老おいい行く。そういう中で、大
塚さん独ひとりりはますます若わかくなつて行いつた……

青空文庫情報

底本：「旧主人・芽生」新潮文庫、新潮社

1969（昭和44）年2月15日初版発行

1970（昭和45）年2月15日2刷

入力：紅邪鬼

校正：菅野朋子

2000年5月20日公開

2005年12月26日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

刺繡

島崎藤村

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>